

志 (トビトビカケ)

一昨年の暮れ、夕食時に妻から、「お父さん高校はまだ行かんでよかと？私も協力するけん、頑張ってみらんね。私に、いつも言いよるたい。もし、相撲取りにならんやったら、高校に行つて、どがんやったやろうって。高校に行つてみらんね。今からでも大丈夫たい。」という妻の言葉に目が覚める思いがし、私を高校に通わせる動機となりました。

今から二十五年前、中学三年生だった私は進路のことで悩んでいました。幼い頃からの夢であった、力士になることを諦めきれず、高校進学を拒みつづけました。周囲は猛反対でしたが、唯一父親だけが、理解を示してくれました。相撲取りは父親の夢でもありません。小さい頃より、為し得なかった父の夢を聞かされたことが、いつしか私の夢に変わっていききました。中学卒業後、夢が叶い十四歳で入門、上下関係や礼儀作法の厳しさ、荒稽古や寒稽古にも耐え、いつも前向きに考えて意気軒昂として、頑張ってきました。しかし、怪我には勝てず、六年という短い力士生活となってしまいました。

引退後、職を探しましたが、なかなか見つかりませんでした。現実厳しく、中卒という壁にぶつかったのです。日に日に不安は募る一方でした。この時、高校へ行くことを考えましたが、私の夢を応援してくれた両親に、これ以上、苦勞をかけることはできず、「高校へ行きたい」と言えませんでした。そんな時、知人に手に職をつけることを勧められ、看護師の道を選びました。二年後、准看護師の免許を取得しましたが、次のステップへ進むためには、どうしても高校進学を諦めきれずにいました。この頃、妻と出会い結婚、子供にも恵まれ仕事に明け暮れる毎日、高校へのチャレンジは断念していました。そのようなとき、妻の言葉に励まされた私は、再び頑張ってみよう、という気持ちになり、家族・同僚・仲間理解と協力を得て、新たな志で通信制へ入学しました。

高校へ入学したものの、学業のブランクが長く、仕事・家庭・学校のバランスがうまく保てず、ストレスを募らせ、絶望のどん底の生活からはい上がることができませんでした。しかし、私を立ち直らせる二つの大きな出来事が起こりました。

一つ目は子供達の存在でした。中学生と小学生の父親である私は、子供達と触れ合うために、

遊びに連れて行くことばかりを考えていました。学業と仕事の両面で自由な休みがなかなか取れず、家族揃っての休みとなれば、ほとんど皆無に近い状態で、父親としての役目は全く果たせていませんでした。ある日、仕事から帰り一息ついて、家庭学習をしている時に、娘が「お父さん、一緒に勉強しよう。」と、声をかけてきました。こんな言葉が子供から出てくるとは予想もしていなかっただけに、子供の成長を感じた瞬間でもありました。勉強を通じて立派に子供達ともコミュニケーションがはかれることを知りました。今では私の方からも子供達に声をかけるようになりました。父親として、そして高校生として見てくれていた子供達に感謝しています。

二つ目は、この中央高校の同級生達の存在です。私の好きな言葉に自他共栄という言葉があります。「自分と他人が互いに、理解し合えてこそ栄えていく」という意味です。同級生達とどう溶け込んでいくか、不安でもあり楽しみでもありましたが、お互いが向き合っていく中で、試験を前にして、元氣のない私を見て、ある年輩の同級生から「男なら最後までやり通して、一緒に卒業しよう。」と言葉をかけられました。何気ない言葉かもしれませんが、私にとっては、ものすごく気が引き締まる思いがしました。それとともに、自分は人に支えられてこ

こまで来たのだと、改めて思いました。

この二つの出来事は、中央高校に入学してからの、私の財産となりました。夢を追いかけて挫折し、二十五年間が過ぎ、今、高校へ通っている私は、良き仲間や熱心に指導してくださいっている先生方と共に、最高の人生を送っていると言っても過言ではありません。ただし現在は、私にとっての通過点にしかすぎないので、目標である卒業に向かって、日々努力精進していきたいと思っています。

最後に高校卒業後は、正看護師取得を目指していきます。一度きりの人生、悔いを残さないよう、これからも、夢と希望を胸に抱き邁進していこうと思います。

平成十七年度『誇りある青春(定時制・通信制高校生の生活体験発表の記録)』より